

2、勤勉についで

私は、前回、比治山学園の五訓の根幹をなすものは、学園長国信玉三先生の教育精神であり、その精神の淵源は、恩師やご母堂の、み教えにあるとして、正直の徳目を取りあげて述べてきた。今回はそれに引き続いて、勤勉の徳目について考えてみよう。

勤勉、それは、怠けることなく熱心につとめはげむことで、古来日本人の美徳の一つに数えられてきた。去る十一月十日のことであるが、訪日中のレーガン大統領は宮中晩餐会の席において、「米国が、下田ではじめて日本を見たときの驚きは、風俗習慣の違いであったが、百三十年後の今日の驚きは、日本の産業経済の進展ということである。そして、それは、勤勉な日本人の美徳によるものと思う。」とて、日本人の勤勉さを賞讃されているのである。



昭和29年 中庭の池のほとりて

わが学園の五訓に取りあげられている勤勉の意味も同様で、怠けることなく、熱心に学業にはげむことなのであるが、その勤勉さは物を大切にしないという儉約の心に裏打ちされたものでなければならぬ。つまり、勤勉とは、無駄をはぶき、物を大切にすることを、熱心につとめはげむことなのである。

さて、国信先生は、母校である鹿児島高等農林学校で四年間、助教として勤務ののち、恩師竹内徳三郎先生のご推挙により、東京帝国大学の鈴木梅太郎先生の研究室に入られたことは、既に述べた。それは、学術研究のためであった。ところが、鈴木先生は、新進気鋭の学徒、国信青年に対し、何の研究課題も与えず、来る日も来る日もビーカー洗いを命ぜられたのであった。しかし、国信青年は、そのビーカー洗いの単純作業に何の不服もいわず、熱心につとめられたのである。科学者にとって大切なことの一つは、継続して積み上げるといふ勤勉な態度であるが、国信青年の二カ月間のビーカー洗いは、それを証明するに十分であった。鈴木先生から「水産動物の肉蛋白」についての研究課題が示されたのは、それから間もなくのことであったという。

ところで、国信先生は、研究の傍ら、鈴木先生の講義や実験の準備のお手伝いもなされていた。鈴木先生は、ビタミンBの発見者として世界的な学者であるが、また、常に、学生の生活指導やマナー指導にも意を用いられていた優れた教育者でもあった。殊に、国信先生が深く感動されたのは、資源の乏しい日本では、たとえ、学問研究のためであっても、決して贅沢や無駄をしてはならないとて、バーナーの火や水道の水の無駄づかいを厳しく指導されたことと、実験が終了した教室の、学生がしめ忘れた水道管の蛇口を、自らがしめて廻られたことだといふ。比治山学園の五訓のうちに、物を大切に、決して無駄づかいしないという儉約の徳に裏打ちされた勤勉の徳が取りあげられたのは、実に、鈴木先生の、み教えによるところが大であったと考える。

私は、先生方が、学生達のため忘れたトイレの蛇口をしめられ、学生の居ない教室の、蛍光灯のスイッチを切

られるのを垣間みた。また、事務室では、メモ用紙に印刷ミスの反古用紙が使われ、封筒も裏がえしの再生したものが使われているのを知っている。それらは、儉約に裏打ちされた真の勤勉の徳の実践といつてよい。

あれは、数年前のこと、短大創設以来お勤め下さっていた田上さんご夫婦が、定年でおひきになった頃の話である。ご夫婦は、毎日印刷室から出るおびただし反古用紙を、勿体ないと思われ、夜なべに、その用紙で紙袋を作られたのであった。それは、当時の教職員の給料袋として使用されたのである。コンピュータ時代の現在は、給料袋も印刷された立派なものとなったが、しかし、田上さんの紙袋は、今なお、出張の際の旅費を入れる袋として利用されているのである。この田上さんご夫婦の作られた紙袋に入った旅費を頂いて出張するたびに、学園長国信先生の盛徳を思い、田上さんご夫婦にも感謝しているのである。

かくて、儉約に裏打ちされた勤勉の徳目は現代に生きる人間のすべてが、心しなければならぬ美德ではないかと考えている。

比治山女子短大新聞（昭・58・12・21）